令和７年度

# 研究のあゆみ

## 我孫子市立新木小学校

### 学校教育目標

「いい声　いい顔　いい姿」
～一生懸命がかっこいい～

### 目指す児童像

「学んだことや自分の考えを表現することができる子」
「『できた（できそう）』を実感し楽しんで運動する子」

### 研究主題

運動が得意な児童も苦手な児童も、
一生懸命に学べる体育授業の実践
～児童の学び合い活動を通じて～

### 研究仮説

①ＩＣＴ機器を活用したり，練習の場を工夫したりすることで，根拠が明確となり，自分の考えを表現することができるだろう。
②学びのグループ構成を工夫することで，活発に意見交換が行われるだろう。
③到達度を明確にすることで，一人ひとりが意欲的に学習に取り組むことができるだろう。

## ＜はじめに＞

本校は，開校当初から平成１３年度まで「体育科」の研究が盛んに行われており，市内小中学校のモデル校でした。体育科の研究といえば新木小，そんな時代だったのを今も覚えています。そんな新木小で，今の体育科指導の良さを継続しつつ，昔の良さをそこに融合させていきたいと考えました。また，昨今，コロナ禍を経て，通常の生活に戻ったように感じられますが，その弊害は大きいと感じています。強く感じていることが，体力の低下とコミュニケーション能力の低下です。“今”新木小学校で何が重要か，子ども達にどんな力を身につけさせていくことが大切なのか，まずは，３年間「体育科」について研究を深めていきたいと強く思いました。そして，２年目が終わろうとしています。

研究主題「運動が得意な児童も苦手な児童も，一生懸命に学べる体育授業の実践～『児童の学び合い』活動を通して～」

体育科の授業において，児童の運動技能の差は顕著に現れがちです。しかし，本校の研究が目指すのは，技能の巧拙のみに価値を置くのではなく，どの子も主役となり，自己の課題に挑戦する喜びを味わえる授業です。

今年度は特に「学び合い」に焦点を当てました。得意な子が教え，苦手な子が助言を求めるという一方向の関係を超え，互いの動きを観察し，言葉をかけ合いながら，共に「できた」「わかった」へと向かう姿が数多く見られました。この過程こそが，共生社会を生きる子どもたちにとって重要な資質・能力を育むものであると確信しております。

最後になりましたが，本研究の推進にあたり，日々情熱を持って指導にあたった教職員，そして熱心にご指導いただいた川村学園女子大学 准教授 松本祐介先生，我孫子市教育委員会指導課 小山真平 指導主事には，大変感謝しております。ありがとうございました。本紀要が，読者の皆様の授業改善の一助となれば幸いです。

校　長　　久本　英雄

## 研究の紀要

本校は，「学んだことや自分の考えを表現することができる子」「『できた（できそう）』を実感し楽しんで運動する子」の育成を目指し，３つの研究仮説を立てました。工夫された練習の場やICTの活用によって，考えの根拠を明確にし，児童が自分の考えを表現することができるような環境づくりを行いました。また，児童の学びが効果的に進むように，「技能面」や「話し合いのスムーズさ」等を考慮して，学びのグループを構成しました。「技の一覧表の作成」や「難易度の異なる練習の場を複数設定する」ことで，児童の学習への意欲向上を目指しました。

「運動が“できる”子」だけでなく，「運動の原理が“わかる”子」も育成できるような単元計画や授業展開を考えてきました。

# 第１学年

岸本和也　新藤真衣

## 単元名　「マットランドの大冒険」

### 本時の概要

本時では，様々な障害物が設置されたマットを，「体勢を低くして進む」「遠くへ跳ぶ」「転がる」等，これまでに学習した動物の動きで進みながらゴールを目指した。「ゴールするためには，どのように動く動物になればよいか？」という学習問題を提示し，動物名ではなく，動物の動きに焦点を当てて授業を展開した。「予想を立てる」→「やってみる」→「グループで動きや攻略法を検討する」→「全体で考えを共有する」→「個人で挑戦する」という学習過程で，児童が既習内容から場に応じた動きをする動物を選び，実践できるようにした。

岩の道

くもの巣の道

第１学年　学習指導案

### 仮説に対する手立て

（仮説１）
- 特徴がある練習の場に対して，「動物になって障害物を超えてゴールまでたどり着く」という明確な課題にする。
- 話し合う観点を「どのような動きをする動物になればよいか」に焦点化することで，児童が活動の見通しをもって学び合い活動に参加し，自分の考えを表現できるようにする。
- 「この場はこの動物」と１つに限定することなく，複数の選択肢が生まれる場（跳び越える＝うさぎ，かえる）を設定することで，思考の幅を広げ，多様な考えが出るようにする。

（仮説２）
- 「運動量の確保」「話し合い時の意見交換のしやすさ」の面から考え，１グループ３人とする。
- 各グループに，「話し合いの進行ができる人」「運動技能が優れている人」を配置し，話し合いと試技がスムーズに進むようにする。
- 各グループで役割（リーダー，持ち物係，整頓係）を決めることで，「活動の円滑化」「一人ひとりが活躍する場」を目指す。

（仮説３）
- 各練習の場の中に，難易度の低いものと高いものの両方を設定し，実践意欲が高まるようにする。
- 学習カードの中に練習の場の一覧を記載し，自分ができるようになった動きに色を塗ることで，達成度を視覚化する。

### 成果と課題

◎既習内容を復習したり，予想を全体で共有したりしたことで，児童が見通しをもって活動できていた。
◎練習の場が工夫されていたので，児童が指導者のねらい通りの動きができていた。
◎それぞれの場の後半に難易度が上がることで，児童が新たな課題に直面し，「この動きだとクリアできないから，別の動きでやろう」と思考を深めていた。
◎場ごとに動きを限定しなかったことで，複数の動きが出て，「どちらの動きがよいか」を話し合うきっかけとなっていた。
◎各グループとも，リーダーを中心にスムーズに活動していた。
△「速さの道」が多様な動きが出すぎて，焦点化しきれなかった。

# 第２学年　柴崎悠華　井上南

**単元名**　「にんじゃ大さくせん」
～マットにんじゅつをマスターしよう～

**本時の概要**

本時では，「うさぎ」「あしか」「わに」の動きに注目し，マットにある教具を基にそれぞれの動きのポイントを見つけるように展開した。よりそっくりな動きを目指し，グループでの話し合いを通して，動きのポイントを考えた。また，グループ内で友だちの動きを見ることで，友だちのよいところも見つけ，伝えられるようにした。

第２学年　学習指導案

**仮説に対する手立て**

（仮説１）
- 各動物の動きに合わせた教具を設定することによって，動きのポイントを話し合いにより見つけやすくする。
- 教具を効果的に設定することにより，話す観点を「動きのポイント」に絞り，自分の考えを表現しやすくする。
- ワークシートに「ヒント」を設けることにより，「体のどこを意識すれば，めあての達成に近づくことができるのか」を考え，それらを根拠に自分の考えを表現できるようにする。

（仮説２）
- 話し合いを円滑に進めるため，１グループの人数を３～４名に設定する。
- 各グループに，「話し合いの進行ができる人」「運動技能が優れている人」を配置し，話し合いと試技がスムーズに進むようにする。

（仮説３）
- 手形や風船，ゴムなどを設置し，各動物の動きが上手にできるよう，到達度を明確にした。

**成果と課題**

◎児童が「楽しみながら」できる授業展開だった。
◎動く時間と話し合う時間とを分けることで，話し合いが活発に行われていた。
◎待っている人がマットの横に並ぶことで，友だちの動きを見ることにつながった。
◎各グループに話し合いのまとめ役を配置することで，話し合いがスムーズに行われていた。
△難易度を変えるなど課題解決の場を設定することで，より深いに学びにつながっていくだろう。
△学習課題を具体的にすることで，学び合いの内容がより一層焦点化され，話し合いがスムーズにおこなわれるだろう。
△全体共有の場で，到達度を明確化することで，それぞれがより到達目標をもって後半の活動が行えるだろう。

# 第３学年　柴田亜須花　今井遥佳

**単元名**　「こんなことできるようになったよ」

**本時の概要**

本時では，前時に学んだ「あごをひく」「両手の手の平をつける」「両足で着地する」という後転のポイントを習得するための多様な場を設定し，技能の習得を目指した。子どもたちは，前時に互いの後転を撮影し合い，よりよい後転になるために出来ていないポイントを伝え合った。話し合いをふまえ，自分が出来ていないポイントを改善するためにはどの場を選べばよいか考え，自分に合った場を選び練習できるようにした。

坂道の場

おしりを遠くにつくための場

第３学年　学習指導案

**仮説に対する手立て**

（仮説１）
- タブレット端末で技を撮影し，自分の身体の動きを見直すことで，できていないポイント・できたポイントに気付かせる。また，練習の場を何種類か用意し，自分で選択し，技を習得できるようにする。

（仮説２）
- 運動量の確保，話し合いの効率の両方を考え，グループ構成は３～４人組で行う。技の完成イメージをもつことができるように，運動が得意な児童を少なくとも１名含むようにする。

（仮説３）
- 技のポイントを４つにしぼり，「できた！」がわかるようにする。ポイントをすぐ把握できるように体育館の壁に掲示する。

**成果と課題**

◎グループに一人はマット運動が得意な児童がいることでポイントを押さえたアドバイスができていた。
◎気を付けるポイントが明確化され，児童が意識して練習に取り組めていた。
◎練習の場を後転のポイントごとに用意することで，自分の課題に応じて練習することができていた。
◎前時の動画を見返す等，児童がICT機器を効果的に活用できていた。
△自力解決の時間は，個人での練習のため，「課題は〇〇だから△△で練習しよう」と適切に判断できないまま学習していた児童がいた。
→友達同士でうまく声掛けができない場合，自分の課題と関係ない場で練習することとなってしまう。
△「タイムシフトカメラ」は，動画の停止や繰り返しの視聴ができないため，ビデオでの分析がよい。

# 第４学年　鈴木若菜　越村華奈

**単元名**　「いい声 いい顔 いい姿」
～目指せ！マット名人～（マット運動）

## 本時の概要

児童がグループで協力しながら，技ごとの「できないポイント」や「改善したい部分」を自分たちで見つけ出し，必要に応じて用具を選び，練習の場づくりを行う学習環境を設定した。さらには，自ら練習方法を選択し，協力して改善に取り組む経験を通して，児童が主体的に挑戦し続ける姿を目指した。

また，互いの動きを観察し合うことで，自分では気づきにくい課題を明確にし，助言する側の児童も技のポイントを整理することができるようにした。

第４学年　学習指導案

## 仮説に対する手立て

（仮説１）
- タブレットで常に手本の動画を視聴できるようにする。
- 自分の演技を動画で撮影し，手本と見比べて足りないところを練習できるようにする。

（仮説２）
- 技能面の異質グループで，運動の得意・不得意，考えることの得意・不得意がそれぞれのグループにいることで学び合いが活発になるようにする。

（仮説３）
- 見本となる動画を手元に置くことで，すぐに正しい動きを確認することができるようにする。

## 成果と課題

◎準備体操に音楽を使うことで，時間を有効活用した。
◎それぞれのグループが，その練習の場を作った意図を話すことができていた。
◎自分たちで，達成するための場を作る「探求」をしている様子がよかった。
◎異質グループでも得意な子が，苦手な子と学び合い，話し合う姿が見られた。
△ICT の活用ができていなかったのでタイムシフトカメラを使うともっとよい。

## 令和七年度　研究同人

【ご指導いただいた先生】
川村学園女子大学　准教授　松本　祐介　先生
我孫子市教育委員会指導課　指導主事　小山　真平　先生

【本校職員】　◎研究主任　○研究推進委員
（校長）○久本英雄　（教頭）○佐々木優　（教務主任）○織原明彦
◎岸本和也　新藤真衣　○柴崎悠華　井上　南　柴田亜須花
○今井遥佳　○鈴木若菜　越村華奈　○松葉武洋　志賀椋太
田口敬一　○前川　翼　○望月琉成　西村優樹　姉崎弘洋
長尾瑠美　○岡崎英俊　石戸祐子　金子由起子　河野聖子
英　貴明　片山眞一郎　武藤雅枝　手塚茉利香　野口和子

# 第５学年　松葉武洋　志賀椋太

**単元名**　「できた！が広がるマット運動
仲間と見つける『コツ』と『美しさ』」

## 本時の概要

本時では，前時で伸膝後転のポイントを学習したことをもとに，伸膝後転の習得を目指した伸膝後転を習得するためにスモールステップを活用した場を設け，自分の課題にあった場を選択し，練習に取り組んだ。また，同じ場で練習する仲間同士で「試技者」「観察者」「動画撮影者」を役割分担し，お互いの技を見合って，できたところや助言を伝え合う「学び合い」を通して，自分も仲間も共に習得を目指した。

坂道の場

マット３枚重ねた場

第５学年　学習指導案

## 仮説に対する手立て

（仮説１）
- 課題解決できる練習の場を複数用意する。自ら場を選ぶことで，自分の課題を明確にし，考えを表現することができるようにする。
- タブレット端末で自分の試技をグループの仲間が撮影することで，良い点や改善点を見つけられるようにする。

（仮説２）
- 同じ課題（同じ練習の場）をもった仲間同士でグループを構成し，試技（課題）を見る人，撮影する人と役割分担をすることで，良い点や課題点を話し合えるようにする。

（仮説３）
- スモールステップで技の完成度が上げられる練習の場を設定し，基準が達成できたら次の場に行くようにする。（合格基準を設定する。）

## 成果と課題

◎多様な場があったことで，自分の到達度がわかり「○○ができていない」と根拠を明確にして表現することができた。
◎タブレット端末で細かな部分を分析したり，繰り返し視聴して分析したりする児童がいたのが良かった。
◎同じ課題をもつ人でグループが組まれたことで，意見交換がしやすそうだった。
◎スモールステップを活用した場の設定であったので，次のレベルに上がれた児童は達成感を感じ，意欲的に取り組んでいた。
△前時で学習した「技のポイント」に対する理解が浅い児童や，「見る観点」が定まっていない児童が多く，質の高い学び合いができていないグループもあった。
△ステップ制にしたことで，なかなか上がれない児童には「やっぱり」上に進めない」という苦手意識が芽生えないかが心配になった。

## 研究全体の成果

○「練習の場」を工夫したことで、運動が得意不得意に関係なく、全ての児童が学び合うことができていた。
○スモールステップを用いて、到達度を明確にしたことで、児童がい意欲的に活動していた。
○体育における「学び合い」を取り入れた授業の流れがつかめた。

# 第６学年　田口敬一　前川翼

## 単元名　「シンクロマット発表会をしよう」

### 本時の概要

本時では，「前転系」「後転系」「倒立系」の３系統の技の中から，グループで１つずつ選び，バランス技を盛り込んだ構成でシンクロマットを行った。「よりよいシンクロマットにするためのポイントは何だろうか。」という学習問題を提示し，「何をどのようにそろえるのか」という視点で、学び合いに焦点を当てて授業を展開した。「予想を立てる」→「やってみる」→「よりよい演技にするためにグループで検討する」→「全体で考えを共有する」→「グループで実践する」という学習過程で，児童がこれまで習得してきた技のポイントを意識し，よりよいシンクロマットにするために学び合えるようにした。

第６学年　学習指導案

### 仮説に対する手立て

（仮説１）

- 自己の課題を解決するために適した練習の場を選び，技の習熟を図っていけるようにする。
- 自分の技や，グループの演技を動画で撮ることで，動きを客観的に見返したり，根拠をもって助言したりできるようにする。

（仮説２）

- 単元を通して，技能異質グループで学習を進めることで，円滑に学び合いを進められるようにする。
- 技能異質グループでシンクロマットに取り組むことで，個人の能力の差なども考慮して意見したり，助言したりする必然性があり，学び合い質的向上を目指す。

（仮説３）

- １つの技を細分化したスモールステップ表を作成することで，自分や友達の技の到達度が明確になり，自分自身の到達度の把握や具体的な根拠をもって友達に助言できるようにする。

### 成果と課題

◎撮影した動画を、学び合いの根拠としていたことが効果的だった。
◎異質集団（技能差がある）での活動だからこそ，「どうにかしないと」という気持ちが生まれていた。
◎演技するグループと動画分析するグループに分かれるので，意見交換の時間が設定しやすかった。
◎自分達で演技構成（到達目標）を決めるため，児童の意欲向上につながっていた。
△「そろえる」ための課題解決に向けた練習の仕方等が児童の中からもっと出るとよかった。
△単元の前後半で，前半（技能）後半（思考）に分けて学習を進めるとさらに効果的かもしれない。
△意見交換の回数を増やすために，実践→分析（意見交換）を繰り返してもよかった。

### 研究全体の成果

△ＩＣＴを効果的に活用することができなかったので，「どの場面で」「どのように」活用するのかを単元全体で検討していきたい。
△学び合い等，思考の時間を多く取ったことで，技能の定着が不十分であった。技能を定着させる手立てを講じる必要がある。

# かしのき学級　望月琉成　長尾瑠美　岡崎英俊　姉崎弘洋　西村優樹　石戸祐子

## 単元名　「まねっこどうぶつ～サーキット～」

### 本時の概要

本時では，これまで学習した，肋木，平均台，トンネル，ボールなどの様々な用具を用いた多様な動きを，もっと上手にできるようになるために，動き方のポイントを考えたり，友だちと伝え合ったりすることができるように，「もっとじょうずにできるようになるには，どうすればよいだろうか。」という学習問題を提示した。前時にワークシートに記入した，「がんばりたいこと」を始めに確認し，自分が頑張りたいことを達成するためにはどうすればよいのかを話し合い，動き方の確認をすることで，意欲的に運動に取り組むことができるようにした。

かしのき学級学習指導案

### 仮説に対する手立て

（仮説１）

- 児童が楽しめる場を設定する。
- 児童が個人の目標を決めて取り組めるような場を設定する。
- 「投げる」「登る」「バランスをとる」「跳ぶ」「くぐる」といった多様な動きができる場を設定する。

（仮説２）

- 自分の考えが表現できるように，「少人数で自分の考えを伝える→全体で共有する」の順番で行う。
- １，２年生が同じグループになるように学び合いのチームをつくる。

（仮説３）

- 児童が高いレベルに挑戦することができるように，各練習の場に「難易度：低」「難易度：高」の２つを設定した。

### 成果と課題

◎様々な動きをする場があり，意欲的に取り組む姿勢が多くみられた。３つのレベルがあることで，自分に合ったレベルで取り組めていた。
◎話し合いの場があることで，意見交換が活発にできていた。
△個人で動いているため，友達の達成度を知らないため，話し合いのポイントがずれてしまう。

### おわりに

我孫子市教育委員会の研究指定を受けて２年目，全職員が一体となって研究を推進してきました。体育にはいわゆる検定教科書やそれに準ずる指導書もないので，指導内容や指導方法が分かりにくいと言われます。しかし本校の教職員は，目の前にいる子どもたちの実態をよく見て把握し，「こんな力をつけさせたい」「できるようになってほしい」「この方法はどうか」等，明確な指導観や願いをもって，職員間及び講師を招聘して協議を繰り返してきました。

体育は，広い空間において，子どもたちが関わりながら，そして動きながら学習する教科です。移動や集合，準備，片付けといったマネジメントを合理的に行う必要もあります。具体的な指導内容だけでなく，４５分間の学習過程そのものをどうするか，今年度研鑽を積む内容は多岐にわたりました。教職員の「一生懸命」な姿は，子どもたちへの「率先垂範」となったことでしょう。

特別支援学級での展開を含め，計４回の校内授業研究会を通して明らかになった成果と課題を来年度に引継ぎ，磨き上げた３年目を迎えたいと思います。

最後となりますが，本校の研究推進にあたり，多大なる御尽力をいただきました川村学園女子大学の松本祐介先生を始め多くの諸先生方に深く感謝申し上げます。

教頭　佐々木　優